

● 論 説

台湾——走向世界・走向中国

台湾における「顔智」^{ガンジ}

——一九二〇年代台湾反植民運動における国際主義の契機——

陳 偉 智

(訳＝嶋田 聡)

● ● ● ● ●

A colonized people is not alone. In spite of
all that colonialism can do, its frontiers
remain open to new ideas and echoes from
the world outside.

Frantz Fanon
(1)

はじめに

一九二〇年代に始まった台湾人の非武装反抗運動は、その政治的論述のなかで、アイルランド、インド、フィリピンなどの土地における反植民運動の例が頻繁に引用されて

おり、運動の意図を表す政治的参考座標として、被植民者あるいは当時のいわゆる「弱小民族」の人々に、反抗としての地政学的想像を提示してきた。このなかでも、ほぼ同時代の英国統治下インドにおける反植民運動を率いた聖雄 Mohandas Karamchand Gandhi (一八六九—一九四八) は、多くの台湾反植民運動者たちが崇拝する反植民運動指導者のひとりであった。当時の台湾における言語使用は、多言語が並存する状態であった。Gandhi は、このような多言語環境のなかで、「顔智」(台湾語の漢文表記)、「甘地」(漢語白話文)、「ガンヂイ」(日本語)という表記によってメディアに登場した。そのうち、「ガンヂイ」というのは

日本語の訳名を借用したものであり、また「甘地」は中国から輸入した白話文の書籍や新聞上で Gandhi の訳名にされていたのを踏襲したものである。「顔智」に至っては、台湾人が漢字で台湾語の音を表記するかたちで翻訳した訳名である。「顔智」の中国語白話文の発音は「Yan Zhi」であり、台湾語の発音だと「Gan-Ti」になる。

こうした訳名の使用は、ただ単に台湾の多言語的現状のメディアにおける現れや訳名の多元的來源を反映しただけのものではなく、この「顔智」という Gandhi を台湾語の音で表した漢字名の使用には、よりいっそう深い意味がある。「顔智」という訳名の使用にあたって、メディアがあらかじめ想定していたのは、台湾語を使用する読者である。当時の台湾では、台湾語を使用する人が人口の大多数を占めていた。一九二〇年代に台湾人反植民運動が運営していたメディア、たとえば『台湾青年』、『台湾』の漢文版、あるいは『台湾民報』は、おもに「顔智」という訳名を採用していた。「甘地」と「ガンジー」のほかに、「顔智」という台湾語漢文表記の訳名が登場したことは、後に指摘するように、とくにこの「顔智」をひとつの意味争奪の場とするときに、台湾反植民運動の思想資源に中国起源と日本起源以外の可能性を出現させただけではない。³と同時に、この台湾当地社会の言語使用状況のうちに確立された可能性は、当時の台湾反植民的知識人たちの、一面では

当地の経験から出発した言語と国際経験の間の翻訳可能性 (the translatability) 確立への試み、さらには、当地の読者に対してというあらかじめの想定のもと、世界的意味をもった記号や概念を当地で使用される言語によって翻訳するやうに同時におこる、当地の言語が表出可能な語彙内容の拡大ということも示しているのである。

さらにいえば、植民母国は違っても同じ植民地という立場にあるインドと台湾ということから、台湾人はインドの反植民経験の指導者を選んで台湾の当時の論述空間 (discursive space) 内部に紹介したのであり、「顔智」(Gandhi) の間に存在する翻訳可能性そのもの、それが成立する所以こそが、共通の被植民という同時代経験の上に形成されているからなのである。台湾人にとってこの被植民という同時代経験は、その当時と未来における、思想と行動上比較対照性をもつひとつの参照体系だったのであり、想像力の地域を跨ぐアイデンティティと団結というのも、それゆえ可能性をもったのである。

本論は、台湾反植民運動の論述におけるガンジーを個々に分析することを通して、反植民運動の国際主義の契機について論じていく。台湾の一九二〇年代の反植民運動において、「顔智」を通して表された「弱小民族」をもって政治的解放の論述とする想像的資源は、日本による植民地統治の脈絡のもと、第一次世界大戦後に開かれた新たな歴史的

時間のなかで形成されつつあった台湾ナショナリズムが、かつて見せた国際主義の契機であった。「弱小民族」論の国際主義の契機のなかに出現した可能性は、おそらく、形成されつつあったナショナリズムを、虚構の血縁共同のもとに打ち立てられる、最終的に漢民族に回収することを目的としたエスニックナショナリズム (ethnic nationalism) とも、現実主義の原則にもとづき帝国の主権を容認し、「日本人になること」を目指すという状況のもとで政治的参与を奪取する公民ナショナリズム (civic nationalism) とも違ったものにした。それは、国家政権の奪取を目的としない、全体的な社会改造のなかでの、当時のグローバルな問題のひとつとしての「弱小民族」全体の解放運動の一環であった。⁽⁴⁾

もちろん、こうした解放運動の歴史は、その直接的な目的を当時実現させることはなかった。しかし、最終的に選択されなかった一本の歴史の路とは、歴史上にかつて存在した道路選択が結局は姿を現さなかったということを代表するものではない。これはけっして反歴史的な探求ではなく、「可能性」の歴史探求なのであり、後の歴史発展によって抑えつけられてしまった可能性を改めて引き出すことなのだ。つまり、かつて存在した国際主義の契機を、国民国家を基底とする歴史発展主義的論述のなかから、また既定の国家の枠に限定された一国民族的想像のなかから解

き放つことなのである。このような歴史的可能性の閃き、つまりベンヤミン (Walter Benjamin) の歴史哲学が提示する歴史解放の可能性の閃きは、あるいは現在直面している資本主義のグローバル再構築のなかに浮かび出てくる当代の歴史問題意識に対する、我々の探索と思考の助けになるかもしれないのである。

一 一九二四年治警事件裁判のエピソード

第一次世界大戦後、日本の植民地統制体制は制度上の変革を行った。⁽⁵⁾ 朝鮮における統治では、武断政治から文化政治へと変わった。台湾においては、法律第三号を制定し、限定的な地方自治を実施しつつ、あわせて内地延長主義および同化主義を制度変革の方針とした。台湾人はこのような新局面に應ずるため、法律第三号が制定される直前に台湾議會設置請願運動をおこし、帝国憲法が賦与する請願権に則って帝国議會に請願を提出し、台湾議會が設置されることを望み、植民地の参政権を要求した。⁽⁶⁾ これと同時に、台湾人側も台湾文化協会を設立し、それを台湾人自らに対する啓蒙運動の団体とした。その後の継続的な議會設置請願運動と、台湾人の反植民運動連合戦線としての台湾文化協会の活動と後に続く組織変革、分裂とによって、一九二〇年代に始まる台湾の非武装反植民運動は開かれたのである。

一九二三年一月一六日、台湾總督府は治安警察法の結社禁止令に違反したとして、台湾議會期成同盟会に参与した構成員を全島的に逮捕、検挙した。この治警事件は、治安警察法の結社禁止令に違反したということで追訴され、求刑は軽いものであったが、明らかに台湾總督府が法律の手段を通して台湾人の政治活動の発展を阻止しようとしたものであった。当然、この事件は台湾人の反抗を打ち砕きはしなかったし、かえってその後反植民運動をより深化させていったのである。

治警事件の法廷での弁論攻防の過程においては、あるエピソードが発生した。台北地方法院檢察官長の三好一八は、一九二四年八月一日、一審の第四目目に法廷に提出した告発状において、この結社禁止違反事件とはまったく関係のない政治的陳述を提起している。

インドは英国の統治下一五〇年で初めて自治権が付与され、台湾は日本の領台後二五年足らずですでに自治権を得ている。しかし、インドには自治権を付与されるに足る相応の理由がある。大戦当時、インドは英国にたいへん忠誠を尽くしたのであり、一九一九年一月に至り、初めて中央議會州議會を設立したのであって、被告のなかにはインドの顔智を崇拜している者が多数おり、現台北港町文化協会の読報社には、顔智の写真が掲げられている。しかし、顔智は親英主義の人

であり、南アフリカ戦争の時には勲章を賜っている。彼が英国に反抗するのは、別に相応の理由があつてのことである。被告らはこのいいところを学ばずに、ただその悪いところのみをまねていて、甚だ顔智その人を理解せぬものであり、まず先に本国にしかるべき誠意を尽くして、それが受け容れられなければ顔智のように憤るのもよい。現在の台湾で顔智と呼べるような人物は、辜顯榮ただ一人だけである。

三好一八檢察官長は、台湾人が崇拜するインドの聖雄顔智^{グンヂ}を例にとり、台湾人が「そのいいところを学ぶ」ようになることを希望した。ここでいう「いいところ」とは、顔智が南アフリカのボーア戦争（Boer War）やズールー戦争（Zulu War）、それに第一次世界大戦の時に、インド救護隊（Ambulance Corp）などの戦争動員活動を組織し、英国を支援したことを指す。それによって三好一八は、台湾人が崇拜するインド独立運動の指導者顔智を「親英主義」者と呼んだのである。さらに、もし「本国にしかるべき誠意を尽くし」という観点からみた場合、台湾で「顔智と呼べるような人物は、辜顯榮ただ一人だけである」と指摘する。

このなかで名前があがった辜顯榮（一八六六一一九三七）は、一八九五年に日本が台北城を接収したさい協力して手柄をたてた人物であり、日本の領台に協力したという

／蕃薯簽比魚翅／破尿壺比玉器」といった対比によってぶざまなものと崇高なものを表す成句が出現し広く伝わった。最終的に、一九二四年に治警事件三審判決が確定した後、台湾の反植民運動者たちに対しては四か月以下の短期禁錮という軽い刑が科せられただけであり、台湾人は自らが当時一連の Satyagraha 運動のかどで一九二二年に英国のインド植民当局から懲役六年の判決を受けた顔智とは比べものにならないということで、恥ずかしく思ったのである^⑩。

三好一八検察官長の告発状のなかでとりあげられた「インドの顔智」協力者＝台湾の辜顯榮」をめぐるのは、治警事件におけるひとつの言語行動 (speech act) のエピソードとなった。この言語行動は、表面的には、もともとの起訴目的である結社禁止令違反とは無関係のように見えるし、さらにはただ単に植民者が「顔智」の業績とイメージの適当な部分を選んで活用しただけでもないようである。その目的とは、すでに台湾反植民運動の政治的論述のなかで反抗者のイメージとして尊崇されている「顔智」というこの記号の、植民地の論述空間における意味内容 (the signified) を、さらに一歩進んで奪い取ることにあった。いい換えると、「顔智」は、日本人と台湾人が互いにその表すところの意味を争う場となったのだ。植民者は、「インドの顔智」＝「反植民運動」という台湾人の反抗的な政

治論述において、「インドの顔智」協力者＝台湾の辜顯榮」という直喩 (simile) を通した言語効果が換喩 (metonymy) 機能を発揮する言語行動によって、記号の意味生産の過程において、高圧的な遮断や禁止ではなく、生産的な指示転換によって、論述内部における記号の意味の否定という対抗的置換を通して、台湾人の反植民運動の論理を覆そうと試みたのである^⑪。

治警事件の公判過程において、「顔智」は思いがけなくもひとつのエピソードになった。このエピソードが成立したのは、これが台湾人の反植民運動が一九二〇年代初めから、同様に植民地、半植民地に属する他の「弱小民族」への関心を通して形成してきた、自らも世界弱小民族に属するという帰属意識、運命を共有する各弱小民族が世界史に占める位置の歴史的自覚のうえに打ち立てられたからである。「顔智」は、こうした弱小民族が世界的位置を自覚する参照座標のひとつを顕現させたのである。これと同じような人物もしくは弱小民族の記号には、ほかにも孫中山、礼寧 (Le-Leng=Lenin)、ケマル (Kemal)、波斯、愛蘭 (Ai-Lan=Ireland)、菲律賓、朝鮮、中国、さらには猶太復国運動 (Zionism) などがある。弱者であることを認識する「弱小民族」論は、このような歴史状況のなかで台湾に登場したのである^⑫。

「顔智」を例に出すという方法は、もっとも早くは『台

湾民報』の前身である『台湾青年』『台湾』誌上に顔智の活動が紹介されていたほか、顔智の運動と学説についても一歩進んだ評論がなされており、さらには顔智を台湾人が「見習う」べき歴史のおよび当代の重要人物のひとりにまで数えあげられていた。⁽¹⁴⁾ また三好一八検察官が指摘するように、台湾文化協会には顔智の写真が掲げられていた。つまり、治警事件発生以前に、顔智ないしインド反植民運動は、運動の過程にせよ、運動を指導する理論にせよ、すでに台湾人の政治論述空間のなかに移入されていたのである。「顔智と辜顯榮」と題する時事短評のなかには、顔智の Satyagraha (当時台湾人は「真理把持」もしくは「真理把握」と訳した) 思想、Swaraj (「自治」「自主」「完全独立」)、Swadeshi (「国産の奨励」)、non-cooperation (「不協調」)、ahimsa (「無抵抗の愛」) などといった重要な反抗哲学に対する、当時の台湾反植民運動による概念把握の様子がはっきりと現れている。⁽¹⁵⁾

治警事件のなかに登場した「顔智」をめぐる争奪戦は、顔智を思いがけなくも協力と反植民の間の意味争奪の場にした。同時に、この場の存在は、台湾人反植民運動の弱小民族論に対するアイデンティティの存在も証明したのである。

二 弱小民族論の空間と時間

治警事件の公判のなかで顔智^{ガンジ}が活用されたことをさらに一歩踏み込んで検討するならば、それは一時の時空転換によつて故意に誤解したり強引に解釈したというだけではない。三好検察官の陳述には、協力者という故意の誤読以外に、実は帝国植民地統治と反植民運動の間に存在する、完全に一国(帝国)の政体を単位とする物質と象徴の意味生産様式に吸収することのできない、世界規模の生産と交換におけるその他のより複雑な側面が反映されているのだ。

こうした要素の集合 (conjunction)こそが、まさに「弱小民族」というアイデンティティ政治を可能にする歴史的・構造的條件 (historical-structural condition) なのである。

まず第一に、統治と反抗のグローバルな二元構造がある。三好一八検察官長は英国のインド植民統治を引用することによつて、それを日本の台湾統治に対する政治的弁護にした。似たようなことは、帝国の間に流通する統治様式の学習、統治技術の交流、植民理論と政策の交換において、統治初期に植民地統治政策が形成されていく頃からすでに存在したのである。この帝国の間に存在するネットワークは、あるいは帝国主義のグローバル生産 (global production of imperialism) のネットワークと呼ぶことがで

ざるかもしれないし、あるいは同時代のレーニン(Lenin)の言葉を用いているなら、全世界を規模とする不均質な分業と分割の「帝国主義の鎖」(imperialist chain)となる。^⑮つまり別々の帝国が、一九世紀末から二〇世紀半ばの第二次世界大戦終結までの間に相互に作用しあった帝国形成(co-imperial formation)である。こうした「上部」構造の存在によって、それぞれの帝国統治下における植民地、半植民地の人々は、この構造のなかに生成する、強権ないしは帝国に対峙する社会的・政治的カテゴリー、「弱小民族」を成立させることができたのだ。最終的には、ある種のグローバルな二元構造——植民母国と植民母国／植民地と植民地——が出現する。このような歴史的・構造的条件によって、三好一八は英国のインド植民統治の前例を援用して台湾の植民地民権運動が時期尚早であることを証明し、台湾人も同時に顔智あるいはその他の弱小民族の前例、もしくは現下の例を援用して、「賢者を見習う」こともできたのである。^⑯

第二に、植民地統治の時間的論理がある。各植民母国にとっては、相互に作用し合う帝国形成の構造のなかで互いの時間は同質であり、ゆえに、相互に学習することや、「平等」の締約や結盟（たとえば日英同盟）、ひいては国境を越えた広域政体（たとえば国際連盟）を主導することが可能となる。植民母国と植民地の間についていえば、時間

差(time lag)が設定されている。この時間差が、植民地統治を合法化する根拠になるのである。三好検察官の告発状には、英国のインド統治を先例とし、統治一五〇年後に初めて自治権が付与されたことが指摘されている。ゆえに、日本が台湾を統治してからたった二十数年で、自治権等の平等権に関するものを付与するのは、「時期尚早」である。またそれゆえに植民者は、台湾人はまず自らの「立脚点と民情」が資格に符合するかどうか、検討してみることを要求するのである。植民者にとって植民地統治とは、時間的落差における時期尚早な時間(temporality of a “not-yet”)の上に確立するものであり、逆に反植民運動の台湾人は、同一的時間の平等な現在の時間(temporality of the “now”)の奪取をめざしているのだ。この時間差の構造こそが、帝国主義の鎖にはめ込まれた各地の被植民者（「半植民地」を含む）の間の、その時間政治における集団的に後れた時間の上に集団的アイデンティティ＝「弱小民族」を形成する基礎を提供したものである。

台湾人反植民運動の要求する同一時間的な政治（政治、経済から社会的平等権に至るまで）については、一九二〇年代に展開される政治運動のなかで、連合戦線から左右の派閥に分裂して、そこから一步進んで別々の政治運動団体を形成するようになり、地方自治の要求から無政府運動ないし台湾共産党の結党まで、これらは「弱小民族」論にも

とづいた同一時間性という政治的要求の違った表現形式と見ることができる。この同一時間性の達成が、たとえば帝国の範囲内（帝国内部での改革運動としての地方自治運動）でのことであろうと、あるいは世界の他の同じ運命のもとにある弱小民族と反抗のなかで同一時間性を共有することであろうと、それは空間においては現下の帝国の政治経済体制の外側に、時間においては現時点の後の未来に独立と解放（無政府運動と共產党）を達成しようと試みるものであった。²⁰つまりこうした同一時間性の基礎のもと、弱小民族論のなかに台湾反植民運動によるアジア想像、ひいては解放という視点からの世界想像が生み出されたのである。当時台湾人の政治的論述に移入された「弱小民族」は、その当時成立したアイルランド自由国（Irish Free State）以外に、中国、インド、フィリピンからペルシャ、トルコ、パレスチナまで、例外なくアジアないし世界の弱小民族をその範疇に含んでいた。

ここで強調しておきたいのは、弱小民族論とは空間的概念（帝国主義の強権統治に対する反抗と資本主義の世界的拡大に対する反抗）であると同時に、時間的な概念（現在」の反抗の同時代性、および不平等な現状の後の平等に解放された「未来」への要求）でもあるということだ。弱小民族論はそれゆえ、台湾の反植民運動において形成された民族主義に、国際主義の契機をもたらしたのである。

三 民族解放から社会革命への可能性

台湾人が一九二〇年代に形成した弱小民族論は、自分たちだけの民族独立と解放運動の視野だけにとどまるものではなかった。弱小民族論とは、一面では資本主義が地球規模で拡大するなかで生まれた経済搾取における弱者のことであり、また一面では帝国領土争奪のなかで生まれた不均質な政治的、地理的空間配置による植民地、半植民地という地位のことでもある。それゆえ、弱小民族の覚醒と運動のなかで、一面的には時間において新たに世界史主体（world-historical subject）の位置の奪回を試み、同時に、空間においても資本主義の不均質な空間が再生産した連結の鎖を解いて（de-link）そこから独立し、もしさらに一歩進んで母国の被搾取階級と同盟を結んで協力することができるとすれば、全体的な社会変革に可能性が付与されることになる。²¹この民族解放から世界全体の変革へという歴史的可能性もまた、当時台湾の弱小民族論のなかで発展しつつあったのである。この発展は、「顔智^{ガジ}」という媒介（mediation）を通して展開されたことがある。以下、台湾反植民運動における社会主義詩人、王白淵（一九〇二—一九六五）の観点を、簡単に検討していく。

一九二〇年代半ば以降に、王白淵は「吾們青年的覚悟」

（一九二七年）と「ガンダーと印度の独立運動」（一九三〇年）を発表した。²⁴「吾們青年的覚悟」のなかで王白淵は、帝国資本主義の拡張から現下の弱小民族の問題点の歴史性を規定し、「帝国資本主義の東洋への漸進」による侵害を受けた「東方民族」を、「一九世紀の外観は、まるで西欧の科学文明の征服するところとなつてしまつたかのようだ」から始まる文脈のなかにおく。王白淵にとつては、一九二〇年代に彼の目の前に出現したインドの国民独立運動も中国の国民革命運動も、いずれも「東洋の黎明運動」なのであり、「どちらも民族の自覚の集中するところに發生した」。そして弱小民族独立の目的とは、「我々の面目、精神の自由、經濟や政治の權利と地位を回復する」ことを主とする。文章のなかで王白淵は、自ら聖雄^{ガンジー}甘地^{ガンジー}の伝記と受難の原理を読んだ後、「同病相哀れ」み、「甘地の心の痛みを深く知つた」ことを述べている。そして、インドは英国の植民統治を受けて奴隸となつた後に、「甘地^{ガンジー}が出現した後、インドの国民独立運動は白熱の頂点に達し、非共同を提唱し、經濟の断絶を實行した」などというふうに、東方民族覚醒の例証としている。王白淵の文中にある「非共同」は non-cooperation、「經濟の断絶」は Swadeshi 運動のことを指す。そして最後には、青年は被压迫民族の民族復興運動を担うべきだと呼びかけている。

「ガンダーと印度の独立運動」においては、王白淵はさ

らに一歩踏み込んでガンダーとインドの独立運動について検討しており、弱小民族の民族解放についても、問題を全体的な社会変革にまで拡大している。王白淵は文中で改めて民族運動の性質を定義し、「民族運動はその本質に於てプロレタリア運動の派生物であり一里塚であり（中略）。現代の民族の対立は資本主義社会の發生と共に始まり資本主義社会の没落と共に消滅する」と述べる。ゆえに弱小民族の解放においても、「インドが単なる民族運動を超えて世界プロレタリア運動の一部として重大な歴史的役割を果しつつある今日に於ても騒然たる社会の中からガンダーの聲が波間に響いて来る」のである。王白淵の顔智^{ガンジー}とインドの独立運動に対する評価の変更は、あたかも後にフランツ・ファノン (Franz Fanon) が第三世界の民族主義について考察するさい強調した、弱小民族の解放運動はグローバルな社会革命と同時に行わなければならない、つまり民族の解放と同時に、社会革命も行わなければならない、というのと同様である。²⁵

一九二〇年代の初めに、台湾人の反植民運動は弱小民族論を形成したのだが、この弱小民族論は、後の異なる政治運動団体が共有する、植民地台湾人の歴史的位^レ置と社会的、政治的カテゴリーに対する自覚の集團的アイデンティティでもあった。そのなかで「顔智」の存在は、台湾人の反植民政治論述に、既成の政治的境界と思想的境界を同時

に跨ぎ越える一種の象徴的資源を提供したのである。「顔智」を通して、台湾人は弱小民族の歴史主体の可能性を想像したのである。「顔智」を通して、弱小民族の覚醒によるアジア黎明時代の到来という解放のアジア想像が可能となったのである。また「顔智」を通して、単一民族解放の政治独立運動から共通の全体解放としての社会革命に展開するという世界的な歴史可能性が、台湾の反植民運動における政治的想像の視野に移入されたのである。

おわりに

本論は、一九二〇年代の台湾反植民運動における、運命を共有していた弱小民族に対する論述を通して、国際主義の契機の下に浮かび出てきた歴史的視野、とくに想像された弱小民族の身分を歴史的行動者として切り開いたアジア想像を、台湾史のうえに確立するというものであった。第一次世界大戦が終結した後の一九二〇年代は、台湾の歴史発展にとって、すなわちひとつの重要な歴史的契機だったのである。

一九二〇年代の植民地台湾は、「顔智^{ガシジ}」というこの表記の上に、二種類の同時に並存する国際的な想像を見出していた。帝国間の植民に関する交換と被植民者の弱小民族という国際的想像である。ひとりの台湾人が論じた弱小民族

論の国際主義が、このような系譜のなかに出現する。あるレベルにおいては、台湾人もこの系譜のなかで中国や近隣区域の変革を見ていたのであり、そこに台湾反植民運動のアジアと世界に関する想像が形成されたのである。

最後に一言、文末に付け加えておきたい。

二一世紀当代の歴史状況において、資本主義の歴史発展は、一九世紀末から第二次世界大戦前後までの形態を超越してしまった。帝国主義は、もはや広域的国家政体形式の領土占領を主とした植民地統治ではなく、第二次世界大戦後の脱植民化運動としいに形成された国民国家を単位とする国際政治の枠組みのなかで、公式帝国 (formal empire) と植民地はどちらもすでに歴史となっている。

「民族」を単位とする弱小民族論は、今日の歴史条件のもと、経済においては資本主義発展形態の変化にさらされている。独占資本主義段階が形成した帝国主義の鎖は、戦後何度かの危機を経て最終的に新自由主義に転向した後、今日の資本主義新自由主義段階の、直接的に帝国主義による領土侵略の行われない「帝国」時代 (empire without imperialism) をなし、経済的搾取の社会形式はますます複雑になり、不均質な政治的、経済的地理空間分布のもとにある各種「ばらばらな群衆」 (multitude) という社会身分の生産が、もともとの身分境界のはっきりした「民族」に対する集団的搾取にとって代わった。同時に、幸いにして

生き残った少数の政治上の「弱小民族」(たとえばチベット)は、ほとんど一国民国家内部の「少数民族」問題にされてしまい、広域的連盟が除去されて国内の少数がグローバルな主体(global subject)になるという可能性以外には、もはや重要な世界的カテゴリーではなくなっているようにも思われる。

このような新たな歴史状況のもと、改めて「弱小民族」論が提供する歴史的可能性を引き出すことは、政治的には国家政体を単位としない広域的連盟を再考し、経済的には不断に自己更新する資本主義のグローバルな発展過程において、たえず生産されると同時にたえず排除されていく社会低層の、その物質的および象徴的側面の歴史的・社会的身分に関するアイデンティティのカテゴリーを重視し、再結集と集団的アイデンティティ再構築の可能性を探索するということである。かつて存在した「少数民族論」を回顧することは、あるいは我々の学習もしくは復習なのであり、下から上に向かってアジアを観察し、世界を観察するひとつのラジカルな出発点なのである。

注

〈一〉 Frantz Fanon, “Concerning Violence,” in *The Wretched of the Earth*, tr. by Constance Farrington, New York: Grove Press,

1963, p. 70.

〈二〉 一九二五年前後にそれまで中国北京に留学していた張我軍が帰台して『台湾民報』の編集を引き継いだ後くらいから、徐々に中国語白話文の翻訳である「甘地」が「顔智」にとつて替えられるようになった。張我軍はガンジを翻訳紹介する文章の序言のなかで、「甘地とはすなわち、台湾における顔智のことである」とことさらに説明している。張我軍「引言」宮島新三郎・相田隆太郎著、張我軍訳「宗教的革命甘地」(『台湾民報』三八)、一九二五年六月二一日、(一三一—一四頁)を参照。

〈三〉 これまでの台湾反植民運動についての研究は、概して外部要素と内部要素を強調する二種類の傾向に分けることができる。内因説は反抗運動の社会経済背景を分析する傾向にあり、植民地の統治過程における植民地資産階級の形成と分化について強調する。植民統治は協力者をつくり出したと同時に、反抗者をもつくり出したのだ。外因説は通常、反抗運動の思想資源あるいはイデオロギーの分析に重きをおく。この二種類の解釈傾向は、どちらも反植民運動当時の同時代的解釈にまでさかのぼることができる。前者としては、たとえば東京帝国大学植民学講座教授の矢内原忠雄は、『帝國主義下の台湾』のなかで、日本帝国の植民地資本主義の発展段階と植民地政府の統治形態が植民地土着資産階級の社会的基礎を形成したことを分析し、さらには植民地民族運動と階級運動の性質や、その間の矛盾や転化を規定した。後者については、たとえば当時の植民地警

察報告が、とくに中国の反帝民族主義や日本内地の社会主義運動といった外来の悪影響について探索している。戦後、外因論はかなり長きにわたって、とくに台湾と中国の二種類の中国民族主義の影響のもと、台湾反植民運動の中国起源をことさらに強調し、それがたとえ漢民族による民族主義の表現や回帰であると見なされようと、つまりは中国近代反帝反封建革命の歴史の付録であるとしてきた。内因と外因というこの二種類の傾向にはそれぞれ欠点があり、前者は容易にイデオロギーの媒介 (mediation) 過程を見落とし、階級あるいは民族意識の形成を、集団利益の機械的反応に単純化して考えてしまう。後者は観念論 (idealism) に流れる危険性がある以外にも、容易に台湾人の自主性 (agency) を廃棄することをもまねく。近年の研究では、これら二種類の傾向の間の動態関係に重点がおかれている。本論は同様に、この内外要素間の動態関係に重きをおく研究方法の展開を試み、顔智のように具体的に使用された記号、反植民運動のなかに出現したもうひとつの世界想像と越境的団結、さらには日本帝国の象徴のなかにあって、各々が競い合う独占資本主義によって形成されたグローバルな帝国主義の鎖 (imperialist chain)、つまりこのもうひとつの世界想像と団結の形成を可能にした歴史条件を分析する。

〈4〉 エスニックナショナリズム、つまり漢民族ナショナリズムによって台湾の反植民運動を定義することを一番最初に行ったのは、戦後の中国ナショナリストではなく、日本

の植民統治当局である。台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌第二編・領台以後の治安状況 (中巻) 台湾社会運動史』(復刻版、台北・南天、一九九五(一九三九)年) 一―四頁を参照。近年の、国民帝国、もしくは帝国公民権の取得あるいは賦与を分析の視点とする研究では、台湾人の非武装反植民運動を、植民地における民権運動と見なしているようである。このような見解は、帝国の政体 (日本) および公民としての身分 (日本人) を、最終的な目標としてあらかじめ想定している。歴史学者山室信一は、近代日本帝国の歴史発展過程は国民国家帝国の発展過程を目指すものであったと見なしている。山室信一『国民帝国日本の異法域統合と差別』(『台湾史研究』一六(二)、二〇〇九年、一―二二頁) を参照。また、呉叡人は「差序式吸収」という言葉によって日本の国家建設と国民形成の間の時間差を説明しており、植民地の反抗運動、ひいては台湾の民族主義は、このような差序式吸収の政治構造と内在張力のなかにめ込まれていたのである。呉叡人「福爾摩沙意識型態——試論日本植民統治下台湾民族運動『民族文化』論述的形成 (一九一九―一九三七) 」『新史学』一七(二)、二〇〇六年、一二七―二一八頁) を参照。

〈5〉 日本統治期台湾における台湾人反抗運動の通論的研究については、許世楷『日本統治下の台湾——抵抗と弾圧』(東京大学出版会、一九七二年) を参照。第一次世界大戦後の台湾反植民運動についての歴史社会学的分析、とくに台湾反植民運動をそのなかに組み入れた世界情勢、中国革

命や日本内地の大正デモクラシー期における政治構造転換の歴史的・政治的動力の分析については、若林正文『台湾抗日運動史研究 増補版』（研文出版、二〇〇一年）を参照。

〈6〉台湾議會設置請願運動の経緯については、周婉窈『日據時代の台湾議會設置請願運動』（台北：自立、一九八九年）を参照。

〈7〉治警事件の法律史的分析については、吳豪人『大正民主』与治警事件』（『輔仁法学』二四、二〇〇二年、一四七頁）を参照。

〈8〉「治安警察法違反嫌疑事件第一審公判特別号」（『台湾民報』二（一六）、一九二四年九月一日、二頁）、および「治警法違反事件公判」（『台湾日日新報』一九二四年八月二日、第二面）に見られる。『台湾民報』には、告発側と弁護側双方の法廷弁論の過程および被告の発言記録が、すべて漢語で記載されている。『台湾日日新報』は日本語の記事であり、公判第四日目（一九二四年八月一日）午前に開廷した、台北地方法院検察官長三好一八の告発文を報道している。両者の記録は、基本的に一致している。

〈9〉「編輯余話」（『台湾民報』二（一五）、一九二四年八月一日、一六頁）。

〈10〉治警事件の判決確定後、『台湾民報』の編集評論には、「治警法の公判 およそこの度有罪の判決を受けた者は、もつとも重くて四ヶ月の軽禁錮刑にすぎず、インドの本當の顔智と比べるとはなはだ慙愧にたえない！」とある。「編輯余話」（『台湾民報』二（二三）、一九二四年一

月一日、二二頁）を参照。

〈11〉陳培豊は類似のメカニズムを分析したことがあり、台湾人が構造的な象徴暴力のなかで自らの主体性を実践する策略を論じている。統治前期に台湾人は、日本植民主義の「同化」論述における「同化」の意味指示の外延性が生み出す「文明」と「民族」の範疇を主体的に活用し、台湾植民地教育のイデオロギー教化、動員の歴史過程に、「文明への同化」と「民族への同化」という二種類の傾向が織りなす発展の原動力を形成した。陳培豊『「同化」の同床異夢——日本統治下台湾の国語教育史再考』（三元社、二〇〇一年）を参照。

〈12〉このような「弱小民族」を代表する人物、地域、民族、運動に関する記号は、当時の政治的言説の至るところに見られる。これらは、ただ単に台湾人がメディアにおいて周辺や世界の時事についての項目を報道、論説したものとされるべきではなく、これは台湾反植民運動のアイデンティティ形成における、共鳴可能な外部の参考体系なのである。

〈13〉たとえば、当時の反植民運動指導者である蔣渭水（一八九〇—一九三一）は、第一次世界大戦後の「動揺時代」のなかに「最も幸福な時代」の存在を見出している。なぜなら、「今日の動揺があるこそ、明日の進歩が出来る」からであり、戦後のトルコとペルシャの復興運動、あるいはインドの「ガンダー」のごとく、どれも弱者でありながら、弱者のために立ちあがり、弱者のために声をあげ、主

張すべき権利を主張した。ゆえに、「動揺時代には横暴なる掠奪の帝国主義に崩壊を来たし、一面には虐げられた弱者の解放を意味する」。蔣渭水「動揺時代の台湾」(『台湾』三(九)、一九二二年、四七—四九頁)を参照。

〈14〉 治警事件以前に顔智を紹介した文献としては、たとえば、雑誌『台湾』は早稲田大学教授の武田豊四郎「新文化の豫言者ガンデイ」(『台湾』三(五)、一九二二年、一六一—二四頁)を転載したことがあり、台湾反植民運動の重要人物のひとりである王敏川も、「社会改造家の顔智(ガンデイ)」(『台湾』四(四)、一九二三年、一—一〇頁)を発表している。文末で、王敏川は特別に次のように述べる。

「ガンジーの一生の活動において、時局がけつして易しくなかったということについては、誰もこれを深く考えてもみないのである」。また、『台湾民報』は社論のなかで顔智、タゴール(Tagore)らを列挙し、台湾人の自覚と進取を激励した。「見賢思齊」(『台湾民報』三(一)、一九二三年五月一日)を参照。それ以外にも、個別の文章で多くのものが顔智を例に出している。

〈15〉 (時事短評) 顔智和辜顯榮『台湾民報』二(一七)、一九二四年九月一日、七頁。補足すべき点としては、顔智の重要な反抗哲学概念が台湾人の思想基盤に移入され、それに対応する本土の翻訳が生み出されたことは、けつして台湾の反植民運動が顔智流反抗運動の本土における翻訳になったということの意味するものではない。「弱小民族」の集団的アイデンティティ、ないし世界において運命

を同じくする他者との想像的団結は、必ずしも各地の反抗運動の、自らの歴史的脈絡のもとでの具体的立場や反抗の策略にとって代わったり、ひいてはそれを消滅させたりはしないのである。

〈16〉 レーニンとは、『帝国主義論』(一九一七年)のなかで、競争する資本主義が独占段階、つまり帝国主義の段階に足を踏み出して形成されるグローバル規模の帝国主義の鎖(imperialist chain)について指摘しており、たとえば母国と植民地、あるいは変遷段階にある「半植民地」などの各政体の形式は、みなこの独占段階資本主義の帝国の鎖にはめ込まれているのである。V.I. Lenin, *Imperialism: The Highest Stage of Capitalism*, (New York: International Publishers, 1939)を参照。

〈17〉 一九世紀末に始まる high imperialism 期には、第二次世界大戦終結に至るまで、民族国家の世界体系が国際関係の政治的枠組みとなったこの時期は、それぞれの帝国国家(imperial state)が、戦時と平時とに関わらず互いに影響を及ぼし合っていた。Ann Laura Stoler, Carole McGranahan and Peter Perdue ed., *Imperial Formations* (Santa Fe: School for Advanced Research Press, 2007)を参照。

〈18〉 この角度から見ると、第一次世界大戦終結のさい、一九一九年にレーニンが成立させた第三インターナショナルは、制度としての弱小民族同盟において表された、その世界的歴史行動者の力を發揮して世界を変革しようとするものであったと見なすことができる。一九二八年に上海で

成立した台湾共産党は、すなわち第三インターナショナルの日本共産党台湾民族支部である。

〈19〉当時、『台湾民報』は、ある社説のなかで古今東西のたくさん的人物を並べてとりあげたことがあり、それによつて台湾人、とくに台湾の青年を激励し、向上心を奮い立たせ、社会改造をうながしたのである。顔智もここに列挙された人物のひとつであつた。「見賢思齊」(『台湾民報』三(一)、一九二三年五月一五日)を参照。

〈20〉台湾反植民運動のさまざまな団体と解放構想の分析については、若林正文『台湾抗日運動史研究』を参照。また、台湾反植民運動のなかで成立したそれぞれ異なる政治傾向の団体の、反抗の政治実践において形成された共作の台湾民族主義イデオロギーの歴史的・政治的分析については、Rwac-Ren Wu, *The Formosan Ideology: Oriental Colonialism and the Rise of Taiwanese Nationalism, 1895-1945*, Ph.D. Dissertation, (Chicago: University of Chicago, 2003)を参照。

〈21〉弱小民族という想像的団結以外にも、台湾反植民運動の各段階および各団体と、当時の日本内地の反対党国会議員、自由主義者、進歩的知識人、記者、法律家、ないしは左翼政党との間に、それぞれ具体的な影響関係や同盟関係があつた。

〈22〉王白淵「吾們青年的覚悟」『台湾民報』一六三、一九二七年六月二六日、一〇一一頁。同「ガンダーと印度の独立運動」「棘の道」(盛岡・久保庄書店、一九三〇年)所収、一〇三一―一五二頁。

〈23〉Frantz Fanon, *The Wretched of the Earth*, tr. by Constance Farrington, (New York: Grove Press, 1963). ファノンが「脱植民化運動 (decolonization)」における民族解放運動に対しては必然的に政治上の民族独立形式を採用しているが、しかし彼はけつして形式上の政治的独立というものとどまり、それが同時に既成の社会生産関係の変革であることを見落としたわけではなく、その上で「新しい人間」(new man)の社会革命の観点について一歩進んだ検討をしている。このことについては、Neil Lazarus, "Disavowing Decolonization: Nationalism, Intellectuals, and the Question of Representation in Postcolonial Theory," *Nationalism and Cultural Practice in the Postcolonial World*, (Cambridge: University of Cambridge, 1999, pp. 68-143)を参照。もしファノンの観点を参考にして王白淵が「顔智」の仲介を通して展開した弱小民族論を読めば、これに類似した考えが見られるであろう。同時に、王白淵の異なる時期における顔智ないし顔智が指導したインド民族解放運動に対する解釈も、「顔智」という記号の意味が台湾反植民運動のなかでたえず発展し、またさらに重要なことは、弱小民族がそのなかにはめ込まれた不均質な時間および空間分配の帝国主義の鎖に対する深い自覚と、もうひとつの世界史に関する解放の思考を証明しているのである。

参考文献

- 「見賢思齊」『台湾民報』三二一、一九二三年五月一日
「治警法違反事件公判」『台湾日日新報』一九二四年八月二日、第二版
「編輯余話」『台湾民報』二二五、一九二四年八月一日、一六頁
「治安警察法違反嫌疑事件第一審公判特別号」『台湾民報』二二六、一九二四年九月一日、二頁
「時事短評」顏智和辜顯榮『台湾民報』二二七、一九二四年九月一日、七頁
「編輯余話」『台湾民報』二二三、一九二四年十一月一日、二二頁
王白淵「吾們青年的覺悟」『台湾民報』一六三、一九二七年六月二六日、一〇一—一頁
王白淵「ガンヂーと印度の獨立運動」『棘の道』盛岡・久保庄書店、一九三〇年、一〇三—一五二頁
王敏川「社会改造家之顏智（ガンヂー）」『台湾』四（四）、一九二三年、一—一〇頁
許世楷『日本統治下の台湾——抵抗と弾圧』東京大学出版会、一九七二年
吳豪人『「大正民主」与治警事件』『輔仁法學』二四、二〇〇二年、一—四七頁
吳叡人「福爾摩沙意識型態——試論日本植民統治下台灣民族運動『民族文化』論述的形成（一九一九—一九三七）」『新

史學』一七二、二〇〇六年、一二七—二八頁

周婉窈『日據時代的台灣議會設置請願運動』台北：自立、一九八九年

蔣渭水「動搖時代の台灣」『台灣』三（九）、一九二二年、四七一—四九頁

台灣總督府警務局編『台灣總督府警察沿革誌第二編・領台以後の治安狀況（中卷）台灣社会運動史』復刻版、台北：南天、一九九五（一九三九）年

武田豊四郎「新文化の豫言者ガンヂー」『台灣』三（五）、一九二二年、一六一—二四頁

張我軍「引言」、宮島新三郎・相田隆太郎著、張我軍訳「宗教的革命甘地」『台灣民報』三（八）、一九二五年六月二一日、一三一—四頁

陳培豐『「同化」の同床異夢——日本統治下台灣の國語教育史再考』三元社、二〇〇一年、新裝版二〇一〇年

矢内原忠雄『帝國主義下の台灣』東京：岩波書店、一九二七年

山室信一著、陳延媛訳「國民帝國日本的異法域統合与差別」『台灣史研究』一六（二）、二〇〇九年、一—二二頁

若林正文『台灣抗日運動史研究』研文出版、一九八三年、増補版二〇〇一年

Fanon, Frantz, "Concerning Violence," in *The Wretched of the Earth*, tr. by Constance Farrington, New York: Grove Press, 1963, pp. 35–106.

Lazarus, Neil, "Disavowing Decolonization: Nationalism,

- Intellectuals, and the Question of Representation in Postcolonial Theory," *Nationalism and Cultural Practice in the Postcolonial World*, Cambridge: University of Cambridge, 1999, pp. 68–143.
- Lenin, V. I., *Imperialism: The Highest Stage of Capitalism*, New York: International Publishers, 1939.
- Stoler, Ann Laura, Carole McGranah and Peter Perdue ed., *Imperial Formations*, Santa Fe: School for Advanced Research Press, 2007.
- Wu, Rwei-Ren, *The Formosan Ideology: Oriental Colonialism and the Rise of Taiwanese Nationalism, 1895–1945*, Ph.D. Dissertation, Chicago: University of Chicago, 2003.